

魏晋南北朝における華南（浙江省・福建省）墳墓の編年的分析

戴 俊 英

はじめに

前稿に引き続き、魏晋南北朝期における華南墳墓の編年的分析を行う際の諸指標を、先行諸研究の成果をふまえながら、整理することが課題である。それは、当該諸墳墓の特徴とそれらの歴史的意味を明らかにするための基本的かつ必須の作業である。

前稿〔文献96〕では、湖南省と江西省を対象としたが、本稿では、浙江省と福建省を対象とする。

なお、具体的な問題関心、そして、研究史の整理は、前稿の該当箇所を参照されたい。

一、筆者における華南墳墓の編年

（一）浙江省

この地域には総計111基の墳墓があり、孫呉の赤烏年－太平年（238－257年）から陳末（589年）までの時期を通じて、多室・双室・単室を問わず様々な種類の墳墓があるが、甬道付き横穴式磚室墓か甬道無しの横穴式磚室墓かの何れかである。墓室の平面類型と内部構造によって、これまでに発掘された墳墓群を二期に区分する。

一期：孫呉の赤烏年－太平年（238－257年）から東晋の中晩期（401年）まで

二期：劉宋の元嘉四年（427年）から陳末（589年）まで

① 一期：孫呉の赤烏年－太平年（238－257年）から東晋の中晩期（401年）まで

この時期のものは全部で87基である〈附表の浙江省1－87〉。墳墓種類の在り様は多様で、多室・双室・単室のすべてが揃っている。斜めに下がった羨道を有する横穴式磚室墓3基、竪穴系横口式で磚製の羨道（竪井磚羨道）を有する甬道付き横穴式磚室墓1基、甬道付きの横穴式磚室墓57基、甬道の付かない横穴式磚室墓26基である。これらの殆どが直壁墓であり、弧壁墓は嵊県東晋墓（M53）〔文献49〕〈附表の浙江省86〉の1基だけである。弧頂が主であるが、前弧後弧や前穹後穹の墓頂もある。墳墓は全て紋様磚を用いた装飾墓である。

多室墓が3基、双室墓が6基、単室墓が78基ある。単室墓は一期における墳墓総数の圧倒的な部分を占めている。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。多室墓のうち、長方双凸形室縦列の後室に片耳室が附いたものは安吉天子崗呉晩期墓（M3）〔文献50〕〈附表の浙江省6〉と紹興官山畧西晋墓〔文献51〕〈附表の浙江省20〉の2基であり、長方形三室縦列・過洞

附両耳室墓は杭州金門檻西晋太安年墓〔文献52〕〈附表の浙江省44〉の1基だけである。双室墓のうち、長方双凸形室縦列墓は、嵊県大塘嶺孫呉墓M101・M95〔文献53〕〈附表の浙江省3・4〉と安吉天子崗西晋太康六年墓M2（285年）〔文献50〕〈附表の浙江省22〉の3基、方双凸形室縦列墓は、安吉三官郷孫呉晩期墓〔文献54〕〈附表の浙江省11〉の1基、長方形双室縦列墓は、金華古方三国墓（M12）〔文献55〕〈附表の浙江省9〉の1基、長方凸形単室附片耳室墓は、衢県街路村西晋墓〔文献56〕〈附表の浙江省27〉の1基である。単室墓は長方凸形単室が33基、長方形単室が26基、長方刀形単室が18基、弧壁長方凸形単室が1基ある。

それらは、地面に大きな竪穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いてあり、斜めに下がった羨道は持っていない。甬道は横砌式で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦の擋土牆が築かれたものが4基、嵊県大塘嶺孫呉墓M104・M101・M95〔文献53〕〈附表の浙江省1・3・4〉、嵊県孫呉天紀二年墓M74（278年）〔文献49〕〈附表の浙江省8〉である。

概ね甬道は短く、2.1mの1基以外はすべて2m以下で、最短は0.5mである。磚で棺床を築いたものが27基あり、棺床の幅はすべて墓室と同じである。煉瓦で祭台を設けている例は、嵊県東晋墓（M14）〔文献49〕〈附表の浙江省87〉の1基だけである。また、排水溝が築かれたものは14基ある。

墓室の後壁に長方形の龕が築かれているものが21基ある。その外に、嵊県西晋墓（M5）〔文献49〕〈附表の浙江省19〉は玄室の四隅に長方形の磚柱が築かれ、嵊県東晋墓（M6）〔文献49〕〈附表の浙江省85〉は玄室の両側壁の上半部に磚製の拱券が2つずつ造られていて、嵊県大塘嶺孫呉墓M101・M95は前室の左・右・後の三壁に低い磚製の牆台が設けられている。

墓磚は銘文磚と銅銭・幾何の紋様磚、人物像・龍鳳・武人の画像磚がある。嵊県大塘嶺孫呉墓M101には龍鳳・銭・網の紋様磚と戈を持った侍衛・朱雀の画像磚があり、嵊県大塘嶺孫呉墓M95のものは“永安六年 朱武所可安塚”の銘文磚と円圈・銭・魚・葉脈紋様磚である。嵊県孫呉天紀二年墓M74（278年）には“天紀二年”の銘文磚と銭・葉脈紋様磚が、嵊県西晋太康九年墓M75（288年）〔文献49〕〈附表の浙江省25〉には“太康九年”の銘文磚と銭葉・卷草・人物像・鳥銭などの画像磚が、安吉三官郷西晋墓には“大吉善”・“宜官高遷”・“萬歲不敗二百萬”の銘文磚と魚・銭・桃紋様磚がある。安吉天子崗孫呉晩期墓（M3）の墓磚は対立双鳳の画像磚で、安吉天子崗孫呉太康六年墓M2（285年）の墓磚には“太康六年八月廿日”の銘文が入っている。紹興後家嶺西晋太康七年墓（286年）〔文献57〕〈附表の浙江省23〉には“太康七年”の銘文磚と対三角銭・龍の画像磚があり、上虞西晋元康七年墓（297年）〔文献58〕〈附表の浙江省26〉には“元康七年陳作”の銘文磚と対三角銭・繩蓆紋磚が、衢県街路村西晋墓（298年）には“元康八年太歲在戊午八月十日造”の銘文磚と銭葉紋様磚がある。杭州金門檻西晋太安年墓（302－304年）〔文献52〕〈附表の浙江省44〉墓磚は対三角紋磚と“太安”の銘文磚で、杭州東晋丞相參軍都郷侯褚氏墓（364年）〔文献59〕〈附表の浙江省75〉のは“四出”の銭紋磚と“晋興寧二年呉郡嘉興県故丞相參軍都郷侯褚府君墓”の銘文磚である。規模としての平均値は、長さ3.93m、幅1.53m、高さ1.62m、体積9.74m³である。

② 二期：劉宋の元嘉四年（427年）から陳末（589年）まで

この時期のものが24基あって〈附表の浙江省88-111〉、葬制の変化が見て取れる。墳墓類型は多室・双室・単室墓で、甬道付き横穴式磚室墓か甬道の附かない横穴式磚室墓の何れかである。そのうち、甬道付きは13基、甬道の附かないものは11基である。奉化南朝梁墓〔文献60〕〈附表の浙江省104〉と紹興里木柵南朝墓（M4）〔文献61〕〈附表の浙江省111〉の2基は弧壁墓であるが、この二つ以外はすべて直壁墓である。すべて弧頂で、どの墳墓も紋様磚を用いた装飾墓である。

多室墓は、長方凸形単室に両耳室の附いた瑞安梁天監九年墓（510年）〔文献62〕〈附表の浙江省105〉が1基あるだけである。双室墓は4基あり、その内訳は前室異形後室刀形双室縦列墓が瑞安桐溪南朝梁墓M124（542年）〔文献63〕〈附表の浙江省109〉の1基、長方形単室の後壁に耳室が附いた墓が嵊県陳禎明二年墓M76（588年）〔文献49〕〈附表の浙江省110〉の1基、長方形双室縦列墓が金華古方南朝梁墓M33（510年）〔文献55〕〈附表の浙江省106〉と瑞安蘆蒲南朝梁墓M152（528年）〔文献63〕〈附表の浙江省107〉の2基である。単室墓は19基、そのうち長方凸形単室墓が3基、弧長方凸形単室墓が1基、長方形単室墓が8基、弧長方形単室墓が1基、長方刀形単室墓が6基である。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長い長方形であるものが多い。

それらは、地面に大きな竪穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いたものである。甬道は横砌式で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦で擋土牆が設けられている例も見られない。甬道の最長は2.6m、最短は0.5mで、1基を除いて全て2m以下である。また、棺床も引き続き造られており、4基が見つかっている。幅は墓室と同じものである。一期にあった祭台は、二期に入ると見られなくなる。また、排水溝が築かれたものが7基ある。

墓室の後壁面に長方形の龕が築かれているものが2基あり、そのうち黄岩秀嶺水庫劉宋元嘉五年墓M39（428年）〔文献64〕〈附表の浙江省89〉は玄室の後壁に1つの長方形龕を、黄岩秀嶺水庫劉宋墓M49（447年）〔文献64〕〈附表の浙江省92〉は玄室の後壁に2つの長方形龕が築かれている。東陽李宅鎮南朝劉宋墓（427年）〔文献65〕〈附表の浙江省88〉では玄室の墓頂に長方形の“天井”が築かれ、新昌十九号南齊墓（483年）〔文献66〕〈附表の浙江省102〉では玄室四隅に長方形の磚柱が築かれている。金華古方南朝梁墓M33（510年）では、前室先端の両隅に磚の角柱が、また前・後室の間には磚の間柱が築かれている。瑞安桐溪南朝梁墓M124（542年）では異形の前室の両側壁に非対称の長方形龕が1つずつ築かれている。

墓磚は銘文磚、銅銭・幾何の紋様磚と魚・獣の画像磚が主である。東陽李宅鎮南朝劉宋墓（427年）の墓磚には“元加四年”の銘文が入っており、蒼南藻溪南朝劉宋墓M6（446年）〔文献67〕〈附表の浙江省91〉では“元嘉廿三年一月一日造”の銘文と対三角網紋様が、黄岩秀嶺水庫劉宋墓M49（447年）では“元嘉廿四年”の銘文と魚銭紋が、黄岩秀嶺水庫劉宋大明六年墓M21（462年）〔文献64〕〈附表の浙江省95〉では“大明六年八月十七日為亡舅造”の銘文と対三角・斜線紋様が、新昌十九号南齊墓（483年）では“齊永明元年八月十日黃□□作”の銘文と対三角銭・魚の画像が、瑞安梁天監九

年墓（510年）では“梁天監九年太歲庚寅九月己亥朔十五日癸丑晉安太守李四世孫沙陽建塊孫峻等爲母陳氏作此大塚”の銘文が入った墓磚がある。規模としての平均値は、長さ3.69m、幅1.34m、高さ1.40m、体積6.92m³である。

浙江省（表4）を総括すると、孫呉の赤烏年（238年）から西晋（280－317年）・東晋（317－420年）を経て、陳末（589年）に至るまで、単室墓が圧倒的多数を占めている。中でも、刀形単室墓（24基）が注目され、人物像・龍鳳・武人の画像磚は浙江の地域的特色となっている。また、甬道付きの横穴式磚室墓が主であるが、甬道の附いていない横穴式磚室墓もある。多室墓・双室墓が併存する状況から単室墓に収斂する傾向がある。玄室は全て直壁で、弧頂が主である。墓室には棺床・排水溝が設けられ、規模は小さい。しかし、時期的な変化も見られる。

一期（238年－401年）において単室墓は墳墓総数の圧倒的な多数を占めている。墳墓型式の在り方は多様で、斜めに下がった羨道（斜坡羨道）を有する横穴式磚室墓、竪穴系横口式（竪井磚羨道）甬道付き横穴式磚室墓、甬道付き横穴式磚室墓、横穴式磚室墓がある。殆どが直壁であるが、弧頂・前弧後弧・前穹後穹の墓頂も少数ながら存在する。また、甬道は2m以下で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦で擋土牆を築いている例は4基あり、墓室には磚棺床・磚祭台・排水溝が築かれている。墓室の後壁面に長方形の龕が築かれているものが21基ある。玄室の四隅に長方形の磚柱、玄室の両側壁の上半部に磚拱券、前室の左・右・後の三壁に低い磚牆台を設けている場合がある。墓磚は銘文磚、銅銭・幾何の紋様磚と人物像・龍鳳・武人の画像磚である。規模の平均は、長さ3.93m、幅1.53m、高さ1.62m、体積9.74m³である。

二期（427年－589年）において、単室墓が墳墓総数の圧倒的な多数を占めている。一期の多様な在り方から横穴式磚室墓へと収斂してくる。甬道の有無はほぼ半々である。墓壁は殆ど直壁であり、墓頂はすべて弧頂になってきた。また、甬道の外に煉瓦で擋土牆を築くという、一期にあるような例は見られなくなり、甬道も2m以下と短くなっている。墓室に磚棺床と排水溝が築かれているが、磚祭台は築かれてない。一期で盛んに築かれた長方形龕が二期に入ると少なくなってきた。墓頂に磚で“天井”が築かれながらはるという、一期には見られなかった例が1基ある。墓磚は銘文磚や銅銭・幾何の紋様磚と魚・獣の画像磚である。規模の平均は、長さ3.69m、幅1.34m、高さ1.40m、体積6.92m³である。

（二）福建省

この地域には総計49基の墳墓があり、孫呉の天紀元年（277年）から陳末（589年）までの時期を通じて、多室・双室・単室を問わず様々な種類の墳墓があるが、何れも甬道付き横穴式磚室墓か、甬道の附かない横穴式磚室墓である。墓室の平面類型と内部構造によって、これまでに発掘された墳墓群を二期に区分した。

一期：孫呉の天紀元年（277年）から東晋の太元三年（378年）まで

二期：東晋末（420年）から陳末（589年）まで

① 一期：孫呉の天紀元年（277年）から東晋の太元三年（378年）まで

この時期のものは全部で15基である〈附表の福建省1-15〉。墳墓類型は双室・単室墓で、多室墓は見つかっていない。甬道の無い横穴式磚室墓が3基ある以外はすべて甬道付きの横穴式磚室墓で、すべて直壁・弧頂である。また、紋様磚を用いた装飾墓でもある。

双室墓が2基、単室墓が13基ある。単室墓は一期における墳墓総数の圧倒的な多数を占めている。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。双室墓には、長方双凸室縦列の浦城呂処塢西晋元康墓M2（296年）〔文献68〕〈附表の福建省3〉や、長方形双室縦列墓の浦城呂処塢東晋興寧三年墓（365年）〔文献68〕〈附表の福建省13〉がある。単室墓は13基あり、そのうち長方凸形単室が5基、長方形単室が3基、長方刀形単室が5基ある。

それらは全て、地面に大きな堅穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いてあり、斜めに下がった長大な羨道は持っていない、甬道は横砌式で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦の擋土牆を築いた例は、浦城呂処塢西晋元康墓M3（296年）〔文献68〕〈附表の福建省5〉1基だけである。総じて甬道は短く、2.1mある1基以外はすべて2m以下で、最短は0.5mである。磚で棺床を築いたものは見られない。煉瓦で祭台を設けている例が2基あり、磚の祭案は1基ある。浦城呂処塢西晋元康墓M1（296年）〔文献68〕〈附表の福建省4〉と南安豐州獅子山東晋墓M2（375年）〔文献69〕〈附表の福建省14〉は磚の祭台を1つ、南安豐州華僑中学東晋咸康元年墓（335年）〔文献70〕〈附表の福建省8〉は磚の祭案を1つ設けている。排水溝が築かれたものが1基あり、荊溪廟後山東晋永和五年墓M2（349年）〔文献71〕〈附表の福建省11〉の排水溝は墓門の内側から外に向けて造られている。

墓室の壁面に長方形の龕が築かれているものが2基あり、半磚幅の平台が1基ある。松政西晋永興三年墓〔文献72〕〈附表の福建省6〉では玄室の両側壁・後壁に方形の龕が1つずつ築かれ、福州西門外東晋永和十年墓（354年）〔文献73〕〈附表の福建省12〉では玄室の後壁に長方形の龕が1つ造られている。また、荊溪廟後山東晋永和五年墓M2（349年）では玄室の後壁面から半磚幅の平台を突出させている。

墓磚は銘文磚や銅銭・幾何・篋梳などを主とする紋様磚である。霞浦眉頭山孫呉天紀元年墓（277年）〔文献74〕〈附表の福建省1〉には“天紀元年七月十日專瓦司造作当□天作□”の銘文磚、銅銭・篋梳・網格・弧線などの紋様磚、浦城呂処塢西晋元康墓M1・M2・M3・M4（296年）〔文献68〕〈附表の福建省1-5〉には“元康六年秋冬告作宜子孫王家”・“元康六年□□□公王家宜子孫”の銘文磚、“四出銅銭”・蓮華・葉脈・網格・円圈線などの紋様磚、建甌陽澤東晋墓M1（331年）〔文献75〕〈附表の福建省7〉には“泰寧二年六月廿日壬子□起”・“咸和六年八月五日黄作”の銘文磚、葉脈・

円圈線などの紋様磚、南安豐州華僑中学東晉咸康元年墓（335年）には“咸康元年十月十六日作此”の銘文磚、人面篋梳・銅錢弧線などの紋様磚、浦城呂処塢東晉興寧三年墓（365年）には“興寧三年七月三日”の銘文磚、“四出”銅錢篋梳・葉脈の紋様磚、南安豐州獅子山東晉墓M2（375年）には“寧康三年”の銘文磚、錢篋弧線の紋様磚、南安豐州獅子山東晉墓M1（378年）〔文献69〕〈附表の福建省15〉には“太元三年七月”と“寧康三年八月甲子八月三日□起□”の銘文磚、錢篋弧線・蓮華などの紋様磚がある。平均値は、長さ4.09m、幅1.36m、高さ1.93m、体積10.74m³である。

② 二期：東晉末（420年）から南朝末（589年）まで

この時期のものとしては34基が知られており〈附表の福建省16－49〉、葬制の様相が変化してきていることが分かる。墳墓類型は多室・双室・単室墓で、何れも横穴式磚室墓である。そのうち、甬道付きの横穴式磚室墓が32基、甬道の附かない横穴式磚室墓が2基ある。すべて直壁墓である。閩侯荊山南朝墓〔文献76〕〈附表の福建省43〉が疊洪穹隆頂である以外はすべて弧頂である。墳墓は墓磚に紋様磚を用いた装飾墓である。

多室墓が2基、双室墓が1基あるのに対して、単室墓は31基ある。単室墓は一期と同じく墳墓総数の圧倒的な多数を占めている。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。多室墓は、長方形双室縦列で前室に両耳室が附いた墓が2基ある。建甌木墩梁天監五年墓（506年）〔文献77〕〈附表の福建省32〉と政和南朝梁墓（M833）〔文献78〕〈附表の福建省33〉である。双室墓は政和南朝梁墓（M834）〔文献78〕〈附表の福建省34〉の1基だけである。単室墓は31基あり、そのうち長方凸形単室墓が16基、長方形単室墓が2基、長方刀形単室墓が13基である。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。

それらは、地面に大きな堅穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いてある。甬道は横卧式で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦で擋土牆を設けている例は見られない。甬道は短く、すべて2m以下で、最長は1.8m、最短は0.5mである。また、一期には見られなかった棺床が盛んに築かれるようになっており、棺床を有する例は23基に上る。なお、棺床の幅は墓室と同じものである。一期に引き続いて磚製の祭台が築かれていて、5基ある。また、磚製の祭案が1基ある。排水溝を築いてあるものが3基ある。

注目されるものとして、多室・双室・単室を問わず墓室壁面に長方形の龕が築かれているものから墓室に密集した磚柱が築かれたものへと変化してきている。玄室内に磚柱が築かれた墳墓が2基、磚柱を密に築いたものが4基ある。また、墓室の壁面に長方形の龕と半磚幅の平台が築かれているものも見られる。

政和南朝宋齊墓（M832）〔文献78〕〈附表の福建省26〉は玄室の四隅と両壁の真中に磚の間柱が築かれており、政和齊永明五年墓M837（487年）〔文献78〕〈附表の福建省28〉は後壁の真中に磚の中柱が1つ築かれている。建甌木墩梁天監五年墓（506年）は甬道の両側壁と玄室の左右・後方の三壁

に磚柱を密に築いている。政和南朝梁墓 (M833) は前後双室・耳室に密に築いた磚柱が28本あり、政和南朝梁墓 (M834) は甬道・前後双室に密築磚柱が30本ある。将楽南朝墓 (M2) [文献79] <附表の福建省42> は甬道の両側壁と玄室の両側面・後方の三壁に密築磚柱を造っている。南安豐州華僑中学南朝墓 (M9) [文献70] <附表の福建省38> は後壁に長方龕1つを設けている。福州北門外元嘉十七年墓 (440年) [文献80] <附表の福建省19> と政和宋大明六年墓M831 (462年) [文献78] <附表の福建省20> では玄室の後壁から磚幅の小平台が突出している。また、南安豐州華僑中学南朝墓 (M10) [文献70] <附表の福建省48> では玄室の後壁から半磚幅の小平台が突出している。

墓磚は銘文磚と銅銭・幾何・魚を主としての紋様磚が多く、侍者・花を供える僧侶・誦經する僧侶・青龍・白虎・飛天・雲氣忍冬・“四出蓮華”などの画像磚もある。

政和宋元嘉十二年墓M835 (435年) [文献78] <附表の福建省1> には“元嘉十二年七月十二日陸氏”の銘文磚や人物像・葉脈・花鳥などの紋様磚があり、また政和齊永明五年墓M837 (487年) には“永明五年起”の銘文磚や人形・葉脈・対三角などの紋様磚、福州橋頭山齊建武四年墓M1 (497年) [文献81] <附表の福建省29> には銅銭・半円圈紋と蓮華紋磚、福州橋頭山齊建武四年墓M2 (497年) [文献81] <附表の福建省30> には“齊建武四年太歲丁丑六月十一日造”の銘文磚がある。閩侯南嶼南朝齊梁墓 [文献82] <附表の福建省31> はすべて紋様磚で飾っており、その内容は侍者・供花僧侶・誦經僧侶・青龍・白虎・飛天・雲氣忍冬・“四出”蓮華などの画像磚である。規模としての平均値は、長さ3.87m、幅1.28m、高さ1.97m、体積9.76m³である。

福建省 (表5) を総括すると、孫呉の天紀元年 (277年) から西晋 (280-317年)・東晋 (317-420年) を経て陳末 (589年) に至るまで、墓室に密集した磚柱が造られる一方で、墓室の壁面からは磚幅・半磚幅の小平台が突出しているという、特徴的な構造物が見られる。単室墓は墳墓総数の圧倒的な多数を占めているが、特に刀形単室墓 (24基) が注目される。また、人物像・龍鳳・武人を題材とする画像磚も福建の地域的特色の一つである。なお、甬道付きの横穴磚室墓が主流であるが、甬道の無い横穴磚室墓もある。多室墓・双室墓から単室墓になる傾向がある。玄室は全て直壁で、弧頂が主である。玄室には棺床・祭台・排水溝が設けられているが、規模は小さい。また、時期的な変化も見られる。

一期 (277年-378年) において、類型別に見ると単室墓が圧倒的な多数を占めている。墳墓型式は、すべて横穴式磚室墓で、そのほとんどが甬道付きである。玄室はすべて直壁であり、墓頂のすべてが弧頂である。また、甬道は2m以下で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦の擋土牆を築いている例が1基ある。墓室に磚の棺床は無く、磚の祭台・排水溝が築かれている。墓室の壁面に長方形の龕が築かれているものが2基あり、半磚幅の平台が突出しているものが1基ある。墓磚は銘文磚と銅銭・幾何・篋梳の紋様磚である。規模の平均は、長さ4.09m、幅1.36m、高さ1.93m、体積10.74m³である。

二期（420年－589年）においても、単室墓は圧倒的多数を占めている。墳墓型式は、ほとんど甬道付き横穴式磚室墓で、甬道のないものは2例のみである。玄室はすべて直壁であり、疊洪穹窿頂の1基を除いてはすべて弧頂である。また甬道は2 m以下で、煉瓦で甬道の外に擋土牆を築くという、一期には在った例が二期では見られなくなっている。玄室において、一期には見られなかった磚製の棺床が盛んに築かれようになる。他方、祭台・排水溝も一期に引き続いて造られている。また、密集して築かれた磚柱もあり、壁面には長方形の龕が築かれたり、磚幅・半磚幅の平台が突出している例もある。墓磚は、銘文磚や銅錢・幾何・魚の紋様磚に加えて、侍者・供花僧人・誦經僧人・青龍・白虎・飛天・雲氣忍冬・“四出蓮華”などの画像磚もある。規模の平均は、長さ3.87 m、幅1.28 m、高さ1.97 m、立体9.76 m³である。

二、華南における墳墓形態の共通性と特異性

前稿及び本稿において、華南（湖南・江西・浙江・福建）に関して、孫呉（222年）から西晋（280年－317年）・東晋（317年－420年）を経て、陳末（589年）に至るまでの期間の墳墓群を整理・分類した上で、墓室構造の変化を基に時期区分を行った。それによって、それぞれの地区において時代とともに墳墓が変わっていった状況が明らかとなり、墳墓形態の共通性と地域に固有な特性を指摘することが可能となった。

以下に、湖南省と江西省に関する前稿での省察も再掲しながら、華南四省の墳墓形態を整理する。

1. 華南における墳墓形態の共通性

第1に、すべての墳墓が、地面に大きな堅穴を掘って、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いている。その甬道は、煉瓦を横砌式に積み上げたものである。また、甬道付きの横穴式磚室墓が主流であるが、甬道附の無い横穴式磚室墓もある〈附表〉。

第2に、多室墓・双室墓・単室墓の三類型のうち、単室墓が圧倒的多数を占めているという事実である。多室墓・双室墓から単室墓になる傾向がある。墓室は全体として細長い。

第3に、玄室の壁面はほぼ直壁である。墓頂は弧頂が主で、弧頂・穹窿頂・前弧後穹・前穹後弧が併存する状況から、弧頂に統一される傾向が見られる。

第4に、墓室に棺床・祭台・排水溝を設けている。玄室の側壁と後壁に長方龕または長方磚柱を築いている。

第5に、紋様磚による装飾墓である。銘文が入った磚や幾何・銅錢の簡素な紋様の入った磚で飾られた墳墓から蓮華・纏枝卷葉花草の複雑な紋様磚や人物像・僧侶・飛天・武人・龍鳳・魚・鳥・獸などの画像磚で飾られた墳墓へと展開する。

第6に、墳墓の規模は小さく、構造も概して単純である。

2. 華南における墳墓形態の特異性

第1に、湖南省の長沙地区のみ弧壁の長方凸形単室墓が多い、墓室の壁面上部には長方龕・直檔仮窓、特に密築の長方龕（＝“窓格”）が築かれている。

第2に、江西省では、平面が長方形の墓室が甬道無しで2つ縦に連なる双室墓・甬道無しで2つ縦に連なる双室で側室が附いた墓や長方形双室縦列がいくつか並列した多室墓、即ち、無甬道の長方形双室縦列のような双室墓・多室墓が存在することである。また、多室・双室・単室に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱が築かれている点。

第3に、墳墓総数において、浙江省でも単室墓が圧倒的な多数を占めているが、その中でも特に刀形単室墓が注目される。また、人物像・龍鳳・武人の画像磚はこの地域の特徴である。

第4に、福建省では、墓室に密築磚柱を造っており、墓室の壁面に磚幅・半磚幅の平台が突出しているものが目を引く。類型別に見て、圧倒的な多数を占めている単室墓の中でも、特に刀形単室墓が注目される。画像磚の人物像・龍鳳・武人も地域的特色の一つである。

三、時期の変遷と地域間の相違

華南全域の共通性とともに、より小さな地域を単位とした差異とそれを共有する地域について考察するものである。

1. 時期の変遷

① 墳墓類型

湖南省では、長沙地区に西晋の太康八年から東晋にかけて多室・双室・単室の三類型が共存しているが、劉宋以後には単室墓に統一されてくる。長沙以外の地区では、孫呉から陳に至るまでほぼ単室墓であり、双室墓は64基のうち3基しかない。

江西省では、孫呉から陳まで多室・双室墓が主流になって墳墓総数の圧倒的な部分を占めている。浙江省では、孫呉から陳にかけて単室墓が多く、その中でも刀形単室墓は24基を数える。また、少数ながら、多室・双室墓も存在している。

福建省では、孫呉の天紀元年（277年）から東晋の太元三年（378年）に至るまで多室墓は見られず、双室墓も2基しかない。殆どが単室墓である。蕭梁の天監五年（506年）からは多室・双室墓も3基見られるが、単室墓が大多数を占めていることは変わらない。特に刀形単室墓は18基ある。

② 墳墓構造

魏晋南北朝期に入ると墓槨が消え、墳墓はすべて墓室構造となった。それらはほぼ横穴式の磚室墓で、主流となるのは甬道付きの横穴式磚室墓と甬道の無い横穴式磚室墓である。この外には、斜めに下がった羨道（斜坡羨道）を有する横穴式磚室墓・階段状の羨道を有する横穴式磚室墓・竪穴式磚室墓・竪穴式土坑墓が少数ながら併存している。墓壁は直壁が主であるが、湖南の長沙地区だ

けは弧壁墓が多い。また、墓頂は弧頂・穹窿頂・前弧後穹・前穹後弧が併存する状況から、弧頂に統一される傾向が見られる。多くの場合、玄室には棺床が築かれているが、祭台が築かれている例はあまり多くない。装飾墓は、銘文が入った磚や幾何・銅銭の簡素な紋様の入った磚で飾られた墳墓から蓮華・纏枝卷葉花草の複雑な紋様磚や人物像・僧侶・飛天・武人・龍鳳・魚・鳥・獸などの画像磚で飾られた墳墓へと展開する。また、規模の平均は長さ3—4 m、幅1—2 m、高さ0.8—4 mで、あまり大きくない。

墳墓の造り方は地面に大きな堅穴を掘って、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いている。甬道は煉瓦の横砌式であるが、甬道の外または甬道と墓室の外側両端に擋土牆が築かれているもの・墓室に排水溝が築かれ、さらに玄室の両側壁と後壁に長方龕または長方磚柱が築かれていることは、中国古代の埋葬制度において画期的なことであり、墳墓における伝統的な内部施設と訣別した、新たなスタイルの誕生は、当時の社会情勢が劇的な変化をしたことを窺わせる。この墓制は南方地区にも広がって、盛んに行われていく。また、各省では、時期的或は地域的な変化もある。

湖南省の長沙及びその周辺地区では、一期（287年—420年）においても単室墓が圧倒的多数を占めていたが、二期（421年—589年）に入ると、すべて単室墓になってきた。甬道付きの横穴式磚室墓が主であるが、一期には見られなかった堅穴式の土坑墓が3基ある。玄室の墓壁は弧壁が主流である状況から弧壁と直壁が半々となり、墓頂はすべて弧頂になった。また、一期には甬道の外に築かれていた煉瓦の擋土牆が、二期に入って見られなくなった。一期には長方形龕が築かれるだけであったが、二期に入ると、側壁に長方龕が築かれると同時に、後壁には長方龕が密集して築かれるようになる（＝“窓格”）。墓磚の紋様は一期の幾何・銅銭から二期の纏枝卷葉花草に変わる。規模の平均値は、一期は長さ3.87 m、幅1.84 m、高さ2.6 m、体積18.51 m³であるが、二期には多少大きくなって、長さ3.77 m、幅1.39 m、高さ4.12 m、体積21.59 m³である。

湖南省の長沙以外の地区では、単室墓の占める割合が比較的大きかった一期（222年—420年）から二期（505年—589年）に入ると、ほぼ単室墓に統一されてくる。なお、一期には見られなかった堅穴式の土坑墓も2基ある。甬道は一期よりも短くなっており、すべて1 m以下である。磚製の祭台が築かれた例も一期より多く4基が見つかっている。また、新しい要素が二期に入って出現する。一期に長方龕が築かれていた墓壁には長方龕が密集して築かれ、“窓格”になった。玄室の壁面から突出した半磚幅の平台には小皿が置かれており、前・後室の両隅と前・後室の間には磚製の半柱が築かれている。墓磚は二期に入って素面磚に変わり、14基のうち10基が素面磚で築かれている。なお、葉脈・幾何・蓮華・魚・卷草・線の紋様磚が残りの4基で用いられている。規模としての平均値は、一期が長さ3.10 m、幅1.0 m、高さ0.76 m、体積2.36 m³なのに対して、二期では少々大きくなって、長さ3.40 m、幅1.33 m、高さ0.99 m、体積4.48 m³となっている。

江西省を、南昌及びその周辺地区と南昌以外地区に二分した。両者に共通していることは、無甬道の長方形双室縦列のような双室墓・多室墓が存在することと、多室・双室・単室を問わず煉瓦で

端柱・間柱・角柱・中柱が築かれているということである。単室墓が南昌地区より多く、墳墓総数の半分近くを占めている。また、甬道に石門が設けられている例が1基ある。甬道は南昌地区のものより長く、1-2 mある。南昌地区で見られる磚製の祭台の代わりに石製の祭案が置かれていて、排水溝は無い。墓磚は南昌地区より紋様が増えてきた。幾何・銅銭・網紋の以外は銘文・葉脈・纏枝・卷雲・弧線・蓮華などの紋様が多くなってきた。規模は少々小さくなってあまり変わっていない。規模の平均は、南昌地区は長さ3.54 m、幅2.05 m、高さ2.29 m、体積16.62 m³で、南昌以外の地区は長さ3.77 m、幅1.4 m、高さ2.04 m、体積10.77 m³である。

浙江省では、一期（238年-401年）と二期（427年-589年）に区分した。一期では多様な型式が共存しているが、二期に入ると墳墓は甬道付きの横穴式磚室墓・横穴式磚室墓の二型式に収斂してくる。殆どが直壁であり、墓頂はすべて弧頂になってくる。甬道は2 m以下である。また、甬道の外に煉瓦の擋土牆が築かれているという、一期に見られたような例は発見されていない。墓室には磚製の棺床と排水溝が築かれているが、磚製の祭台は無い。一期では盛んに築かれていた長方形龕が二期に入ると少なくなる。また1基だけとは言え、墓頂に“天井”が築かれているという、一期には見られなかった例が見られる。規模は、大きく変わってはいない。一期における規模の平均は、長さ3.93 m、幅1.53 m、高さ1.62 m、体積9.74 m³で、二期は長さ3.69 m、幅1.34 m、高さ1.40 m、体積6.92 m³である。

福建省の墳墓群を、一期（277年-378年）と二期（420年-589年）に区分した。単室墓は墳墓総数において圧倒的多数を占めている。墳墓型式は甬道付き横穴式磚室墓と横穴式磚室墓で、すべて直壁・弧頂である。墓室には磚製の祭台・排水溝が築かれ、壁面には長方形の龕と半磚幅で突出した平台が築かれている。ただ、二期に入ると、甬道の外に煉瓦の擋土牆を築くという、一期に在った例は無くなる。玄室には、磚製の棺床が盛んに築かれるようになり、密集した磚柱が築かれている。銘文磚や銅銭・幾何・魚の紋様磚の外に、侍者・花を供える僧侶・誦經する僧侶・青龍・白虎・飛天・雲氣忍冬・“四出”蓮華などの画像磚がある。規模は殆ど変わっていない。規模の平均は、一期は長さ4.09 m、幅1.36 m、高さ1.93 m、体積10.74 m³である。二期は長さ3.87 m、幅1.28 m、高さ1.97 m、体積9.76 m³である。

2. 地域間の相違

- ① 裝飾墓：孫呉の初め（222年）から陳末（589年）にかけて銘文磚と紋様磚で飾られた墳墓が盛んに造られている。但し、東晋の時期に至っても浙江省では複雑な人物像・龍鳳・武人の画像磚で飾られている。南齊・蕭梁の時期に、福建省では侍者・花を供える僧侶・誦經する僧侶・青龍・白虎・飛天・“雲氣忍冬”・“四出蓮華”などの画像磚が出現している。これらは他処では見られないものである。
- ② 湖南省では、多室・双室・単室を問わず弧壁墓が卓越している。113基のうち直壁墓はわずか33

基に過ぎない。その点では、殆どが直壁墓である他処の状況とは明らかに異なった様相を見せている。

江西省で前室と前後室間無甬道縦列の双室墓が見られる点は注目される。

刀形单室墓が浙江省（24基）・福建省（18基）で多いということは注目すべき特徴である。

- ③ 湖南省では墓壁に長方龕が密集したもの、即ち“窓格”を設けているのが目を引く。また湖南省の長沙以外の地区では、棺床そのものではないが、棺を支えるという棺床と同様の機能をもった“棺架”というものが見られる。それは他処では見られないものである。江西省では多室・双室・单室に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築いてあるものが注目される。福建省では南齊・蕭梁の時期に築かれた密集した磚柱が顕著な特徴となっている。

3. 文化地域間の波及と受容

“華南”は、湖南省・江西省の武漢を中心とした地域と、南京を中心とした浙江省・福建省とに二分される。これらは長江流域の中心部から離れた地ではあったが、西晋王朝の滅亡に始まる諸民族の大移動によって中心地域からの様々な影響を受けることになった。その一方で、土着の文化的伝統を基にした強固な地域性をも保持し続けたのであった。

例えば、湖南省における階段羨道横穴式磚室墓・密集して築かれた長方龕、長沙地区の弧壁墓や長沙以外の地区の棺架がそれに当たる。江西省では前室と前後室間無甬道縦列の双室墓や多室・双室・单室のそれぞれに煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築いていることである。浙江省では、刀形单室墓である。また、1基発見されているだけだが、墓頂に磚で“天井”を築いているものがある。福建省では刀形单室墓がそれであり、また南齊・蕭梁の時期には磚柱が密集して築かれている。

結

二稿に渡って、魏晉南北朝における華南諸省（湖南・江西・浙江・福建）の墳墓について時間的な変化と地域の差異を基にして具体的に検討してきた。その結果、大規模かつ豪華な墓作りに熱心であった後漢とは異なり、この時期には、構造が簡単で規模もささやかなものに変わったことが明らかになった。その背景には、当時の人々の墓葬に対する意識に大きな変化があったことが推量される。このような墓葬制度の急激な変革に伴う思想的・イデオロギー的背景を明らかにすることが必要と思われる。魏晉南北朝期において、仏教弘布に伴って新しい思想・文化・意識形態が到来したことや、激しい政権交替・恒常的な民族移動が誘因となって騎馬民族などの習俗が取り込まれたことなど、いくつかの要因が想起されるが、その具体的な解明は後稿に譲ることとする。

注：相応する訳語の見当たらない術語については、取り合えず中国におけるものをそのまま用いた。

【参考文献】

(＊数字番号は、前稿から続く。)

- 49) 嵊県文管会「浙江嵊県六朝墓」『考古』1988年9期
- 50) 安吉県博物館・程亦勝「浙江安吉天子崗漢晉墓」『文物』1995年6期
- 51) 梁志明「浙江紹興官山西晉墓」『文物』1991年6期
- 52) 浙江省文物管理委員会「杭州金門檻西晉墓」『考古』1961年4期
- 53) 嵊県文管会「浙江嵊県大塘嶺東吳墓」『考古』1991年3期
- 54) 浙江省文物管理委員会「浙江安吉三官郷的一座六朝初期墓」『考古通訊』1958年6期
- 55) 金華地区文管会「浙江金華古方六朝墓」『考古』1984年9期
- 56) 衢県文化館「浙江衢県街路村西晉墓」『考古』1974年6期
- 57) 紹興県文管所「浙江紹興坡塘郷后家嶺晉太康七年墓」『考古』1992年5期
- 58) 上虞県文化站・朱瑞錢「浙江上虞發現晉墓」『文物資料叢刊』第2集(1978年)
- 59) 浙江省文物管理委員会「杭州晉興寧二年墓發掘簡報」『考古』1961年7期
- 60) 周瑞燕・林士民・王利華「浙江奉化県南梁墓」『考古』1984年9期
- 61) 紹興県文管所「浙江紹興里木柵晉、唐墓」『考古』1994年6期
- 62) 潘知山「浙江瑞安梁天監九年墓」『文物』1993年11期
- 63) 浙江省文物管理委員会「浙江瑞安桐溪與蘆蒲古墓清理」『考古』1960年10期
- 64) 浙江省文物管理委員会「黃岩秀嶺水庫古墓發掘報告」『考古學報』1958年1期
- 65) 趙寧「浙江東陽県李宅鎮南朝墓」『考古』1991年8期
- 66) 新昌県文管会・潘表惠「浙江新昌十九号南齊墓」『文物』1983年10期
- 67) 温州市文物処「浙江蒼南県藻溪南朝墓」『考古』1986年7期
- 68) 福建省博物館・浦城県文化館「福建浦城呂処塢晉墓清理簡報」『考古』1988年10期
- 69) 晉江地区文物管理委員会・泉州市文物管理委員会「福建南安豐州獅子山東晉墓」『考古』1983年11期
- 70) 福建省文物管理委員会「福建南安豐州東晉、南朝、唐墓清理簡報」『考古通訊』1958年6期
- 71) 黃漢傑「福建荊溪廟后山古墓清理」『考古』1959年6期
- 72) 盧茂村「福建松政県發現西晉墓」『文物』1975年4期
- 73) 曾凡「福州西門外六朝墓清理簡報」『考古通訊』1957年5期
- 74) 黃亦釗「霞浦發現東吳天紀元年墓」『福建文物』1989年1—2期合刊
- 75) 建甌県博物館「福建建甌陽澤晉墓清理簡報」『考古』1989年3期
- 76) 黃漢傑「福建閩侯荊山、杜武南朝、唐墓清理記」『考古』1959年4期
- 77) 許清泉「福建建甌木墩梁墓」『考古』1959年1期
- 78) 福建省博物館・政和県文化館「福建政和松源、新口南朝墓」『文物』1986年5期

- 79 李双柱・李建軍・劉暉琦・馬強「将楽岡座南朝墓清理簡報」『福建文物』1989年1—2期合刊
- 80 林公務「福州南朝墓、莆田唐墓清理簡報」『福建文博』1982年1期
- 81 福建省文物管理委员会・黃漢傑「福建閩侯閩口橋頭山發現古墓」『考古』1965年8期
- 82 福建省博物館「福建閩侯南嶼南朝墓」『考古』1980年1期
- 83 江市博物館「江西九江黃土嶺兩座東晉墓」『考古』1986年8期
- 84 平江・許智范「江西吉安南朝齊墓」『文物』1980年2期
- 85 金華地区文管会・武義縣文管会「浙江武義陶器廠三国墓」『考古』1981年4期
- 86 新昌縣文管会・潘表惠「浙江新昌南朝宋墓」『文物』1983年10
- 87 林華東・展汝「寧波慈溪發現西晉紀年墓」『文物』1980年10期
- 88 牟永抗「浙江金華縣竹馬館發現晉墓」『考古』1957年1期
- 89 沈作霖「浙江紹興鳳凰山西晉永嘉七年墓」『文物』1991年6期
- 90 新昌縣文管会「浙江新昌東晉墓」『考古』1993年5期
- 91 朱伯謙「浙江富陽發現晉墓」『考古』1955年5期
- 92 曾凡「福州洪塘金鷄山古墓葬」『考古』1992年10期
- 93 福建省博物館「福州屏山南朝墓」『考古』1985年1期
- 94 慮茂村「福建甌水西山南朝墓」『考古』1965年4期
- 95 福建省博物館「福建甌水南機磚廠南朝墓」『考古』1993年1期
- 96 拙稿「魏晉南北朝における華南（湖南省・江西省）墳墓の編年的分析」『岡山大学文化科学研究科紀要 第18号』2004年12月.

展之單位: m

[illegible]

[illegible]

長度單位: m

[illegible]

表4 浙江省の墳墓編年一覽表

時期	種類	形式	墓壁	墓頂	封門	棺床	祭台	排水溝	墓壁面	裝飾	規模(平均値)
一期 238年-401年 87基	羨道横穴磚室 3基	多室 3基	ほぼ直壁	弧頂	木(石)門 無	磚棺床 27基 (同幅)	磚祭台 1基	排水溝 14基	墓壁に長方竈を築く 21基	銘文と幾何・銅錢の紋様碑と人形・龍鳳・武士の画像碑	393 × 153 × 162 = 9.74
	堅井横道横穴 1基 甬道横穴磚室 57基 横穴磚室 28基	双室 6基 單室 78基	弧壁 1基	前弧後穹 1基 前穹後穹 1基	横土牆 4基 甬道は2m以下 1基だけ 21m				磚臺台 2基 磚柱 1基 磚拱券 1基		
二期 427年-588年 24基	甬道横穴磚室 13基	多室 1基	ほぼ直壁	全て弧頂	木(石)門 無	磚棺床 4基 (同幅)	磚祭台 無	排水溝 7基	墓壁に長方竈を築く 2基	銘文と幾何・銅錢の紋様碑と魚・獣の画像碑	369 × 134 × 140 = 6.92
	横穴磚室 11基	双室 4基 單室 19基	弧壁 2基		横土牆 無 甬道は2m以下 1基だけ 2.8m				非対称竈 1基 磚柱 2基 磚天井 1基		

表5 福建省の墳墓編年一覽表

時期	種類	形式	墓壁	墓頂	封門	棺床	祭台	排水溝	墓壁面	裝飾	規模(平均値)
一期 277年-378年 15基	甬道横穴磚室 12基 横穴磚室 3基	双室 2基 單室 13基	全て直壁	全て弧頂	木(石)門 無 横土牆 1基 甬道は 2m 以下 1基だけ 21m	磚棺床 無	磚祭台 2基 磚祭案 1基	排水溝 1基	墓壁に長方竈を築く 2基 後壁に半磚平臺を築く 1基	銘文と幾何・銅錢・蓮華・壁流の紋様碑	409 × 136 × 193 = 10.74
二期 420年-588年 34基	甬道横穴磚室 32基 横穴磚室 2基	多室 2基 双室 1基 單室 31基	全て直壁	ほぼ弧頂 量状穹隆頂 1基	木(石)門 無 横土牆 無 甬道は 2m 以下 最長 1.8m	磚棺床 23基 (同幅)	磚祭台 5基 磚祭案 1基	排水溝 3基	墓壁に長方竈を築く 1基 後壁に半磚平臺を築く 3基 磚柱 2基 磚密柱 4基	銘文と幾何・銅錢・雲新・蓮華の紋様碑と侍者・僧人・飛天・龍虎・鳥の画像碑	387 × 128 × 197 = 9.76

(*表番号は、前稿の湖南省・江西省に関する同内容の表と連続する。)